

299. 低地の複合遺跡 石田遺跡出土遺物について

1. はじめに

石田遺跡は能登川町大字林・山路地先に所在する。標高88m前後の沖積地に立地し、現在は湖岸から約5km内陸部にあたるが、付近は近年まで網状のクリーク（水路）が発達し、随所に水郷風景の名残がみられ親水性の高いところである。遺跡の西南方には昭和初期まで栄えた能登川港があり、古来より琵琶湖へ開く水上交通の拠点に位置している。遺跡現況の大部分は水田であったが、市街化の進行とともに平成4年から発掘調査が増加し、区画整理事業とともに平成10年度から本格化した。

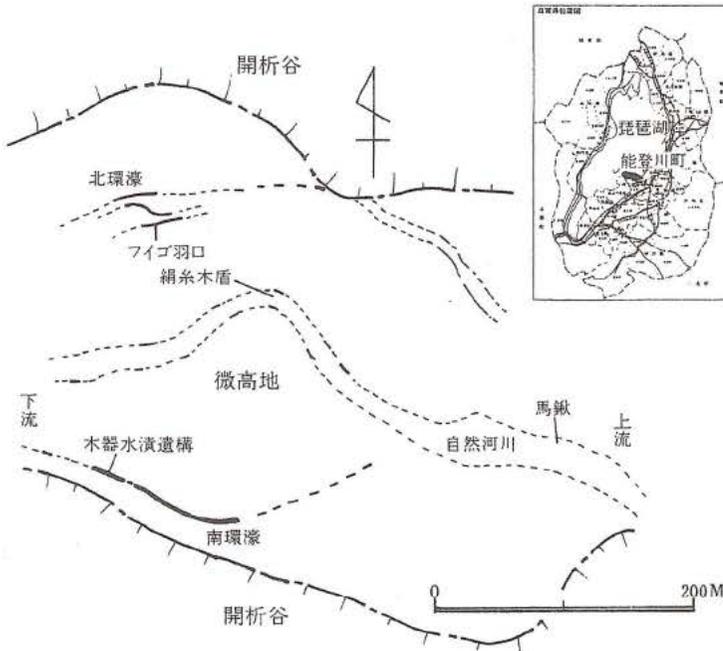
これまでに発見された主な遺構は、縄文時代後期の

竪穴住居・埋甕、弥生時代後期の環濠・掘立柱穴群、古墳時代初頭の竪穴住居・自然河川、古代末から中世の条里遺構・掘立柱建物・区画溝など多種多様である。またこれに伴って各時代の土器はもちろんのこと、縄文時代では土偶・石棒など祭祀遺物が、弥生時代では青銅器鑄造遺物・木器類など生産関連遺物が、古墳時代前期では馬鍬・絹糸装飾木盾など渡来系遺物が出土しているが、これらは各時代の特徴を示す個性的な遺物群といえる。

これらの遺物は、すでに数冊の調査報告書などで報告を行っているが、今回この紙面においてまとめて紹介したいと思う。

2. 縄文時代の遺物

石棒 平成4年度の調査で、弥生後期の環濠（SD-1）埋土から出土した。付近には縄文時代後期初頭～前葉の遺物包含層が広がり、当該期の埋甕を持つ竪穴住居も存在する。石棒は折損しており残存長さは16.5cm、直径は9.6cmである。軟質の凝灰岩製で全面の研磨は丁寧に施され、断面形はほぼ正円である。亀頭部の作出は精巧で、くびれ部の研磨も著しい。亀頭先端部が平坦に研磨されているのも特徴である。全体の形状や製作上の特徴から、おもに縄文時代中期後半に中部地方で盛んに用いられる石棒とみてよい。また強く被熱して白色化がみられることから、火にかけられた祭祀に用いたことがわかる。この類の凝灰岩は近郊では産出せず、縄文時代の石棒生産遺跡をもつ飛騨地方からの搬入品の可能性が考えられる。なお石棒は弥生環濠から出土していることから、弥生期に何らかの作業中、縄文時代後期初頭の遺物包含層から掘り出されて、その珍妙な形態から宝物として



第1図 石田遺跡概略図

保持されていた可能性が高い。

1号土偶 平成12年度(第7次)で出土した。縄文時代後期前葉(約3800年前)の土器片などと共に、土坑状の遺構から見つかっている。全体の高さは5.1cm、手を広げた横幅3.2cm、胴の部分の厚さは1.2cm、胸の部分では1.8cmを測る。淡橙白色の素焼き粘土できており、顔、左腕、左胸が壊れている。はっきりと乳房を盛り上げて女性像が表現されている。

表裏両面の首から右腕にかけて、直径1mmのクシのようなもので刺突して首飾り状の模様を描いている。足は極端に短く、股を2mmの切れ込みを入れて表現している。また、左の背中が縦方向に削られている。

2号土偶 同じ調査で、石棒が見つかった弥生時代の環濠から出土したものである。高さ5.9cm、手を広げた横幅5.2cm(残存幅)である。胴の厚さ1.6cm、胸の部分で2.2cmを測る。淡灰褐色の素焼き粘土できている。腰から下と右腕が壊れているが、はっきりと乳房を盛り上げて女性を表現しており、1号よりやや大きい土偶である。また1号と同様、前・後の両面と肩部のほぼ全面に、直径2mmの竹管状の棒で連続した刺突をして模様を描いている。頭部は極端に小さく、三角形状に尖った表現をしている。

2号土偶はほぼ全面に竹管状の棒で連続した刺突をしており、入れ墨を表現している可能性がある。また、1号ではわからなかった頭部が2号と同様に三角形状に尖ったものであることが考えられる。2号土偶は1号土偶よりも部位の作り方や表現方法が面白いであることから、縄文時代中期の東日本文化から影響を受けたとみて、土偶づくりの技法上2号の方が古いことが考えられる。さらに、石田遺跡出土の土偶は2点とも手を挙げた表現をしていることから、北陸地方の縄文中期文化の影響を受けたとみられる。県下では27・28点目で、町内では初出土である。

これまで日本中で数千点の土偶が見つかっているが、

ほぼすべてが女性表現をもっており、さらに体の一部が壊されるという共通点がある。このことから、土偶は自然界の女神であったという説が有力である。縄文人は生活の多くを自然の恵みに頼っており、ドングリなどの不作は生命維持をおびやかす重大事であっただろう。「母なる大地」といわれるように、豊かさを生み出す自然界や大地に、大切な子孫を産む女性のエネルギーを重複させたようである。また、ほとんどの土偶が壊されていることについては、死んだ女神の体の一部からたくさんの食べ物が生み出されたという神話が古事記・日本書紀、また、太平洋一帯の民族事例に共通しており、収穫祭の後に女神像を壊してバラバラに地面に埋める儀式が縄文時代にもあったとみられる。

3. 弥生時代の遺物

弥生時代後期には、環濠を巡らす集落が出現する。環濠は南側に1条、北側に3条確認され、その規模は推定南北約200m、東西約250mで平面プランは楕円形を呈する。南側環濠には、内と外を結ぶ陸橋が検出されている。

また南側環濠の一部には、周囲よりやや掘りくぼめた貯木場的な遺構が確認され、鋤・鍬の未製品が意図的に並べられた状態で出土している(第3次)。この発見により環濠が従来考えられていた防衛的機能だけではなく、多機能な施設であることが明らかとなった。

内2条の環濠は後期後半には埋没するが、北側の最も外側の環濠は布留式併行期まで存続する。その他、集落内を東から西に蛇行し貫流する自然河川が検出されている。

弥生土器 環濠および自然河道から出土する。甕、壺、高坏、器台、鉢、底部穿孔土器、手焙形土器など典型的な弥生後期の器種構成である。甕は大半が受口状口縁で、施文は主に頸部に列点文、頸部から肩部にかけて上位から平行線文、列点文が施される。また、



写真1 1号土偶(左)と2号土偶



写真2 環濠と土器群



写真3 青銅フィゴ羽口出土状況



写真4 木製農具出土状況

体部中位から下位にかけて貼り付け突帯を施すものや、波状文を描くものも認められる。調整は外面ハケメ、内面ユビナデで、頸部内面にはハケメを施す。壺は受口状、直口、広口、長頸などバラエティに富む。高坏は通有の器形以外に、深い坏部を持つものなどが存在する。器台は受部、裾部とも大きく開くもの、脚部が柱状のものがある。

フィゴの羽口 平成12年度（第6次）の調査で、北環濠の内側溝の肩部分から出土した。先端部がL字状に曲がる羽口で、奈良県唐古・鍵遺跡や大阪府東奈良遺跡出土のそれと類似する。法量は全長32cm、先端部分の外径3cm、内径2cm、基部の外径5.5cm、内径3.7cmを測る。調整は体部中央付近がハケメ調整で、その後両端から中央に向かってヘラケズリを施す。基部は送風管を接続するためか若干ラッパ状に開き、内面には成形時の擦痕が確認できる。先端部分は熱を受け変色、硬化しており、内面には蛍光X線分析により銅成分が検出された銹滓が付着している。フィゴ羽口は単体で用いられたものではなく、炉内の温度を上げるために複数用いられたと考えられる。

これと同地点で、直径2～3cm大の残渣が数点出土

している。残渣とは、高温の溶銅と、それを取り入れる容器に貼りつける精製された粘土（真土）とが接触して発泡したもので、蛍光X線分析によって青銅成分である銅、錫、鉛などが検出されている。このことより当遺跡で、当時の先端技術である青銅器生産を行っていたことが判明した。しかしながら、るつばや鑄型などの関連遺物は発見されず、工房跡と考えられるような建物や炉跡も検出されなかった。

金属製品 銅鏃（4・5次調査）や鉄斧（7次調査）が出土している。銅鏃は河跡などから出土し、現在までに3本が確認され、うち2本は有茎鏃、残り1本が有茎でかえりが大きく、身の稜付近に4か所の穿孔を施す多孔銅鏃である。多孔銅鏃は鏃身長3.9cm、鏃身幅2cmを測り、断面は扁平な菱形を呈する。鉄斧は河跡から出土したもので、長さ10.5cm、刃幅5cmを測る袋状鉄斧である。

木製品 木器の大半が鋤や鍬を主体とする農耕具で占められ、建築部材や祭祀具や狩猟具なども出土している。農耕具は鋤、広鍬、泥除け、木包丁、竖杵など多種多様なものがある。建築部材では、ほぞ穴の位置や角度から柱や梁、桁が想定できるものがある。祭祀具としては、稲作などの豊穰を祈願したと考えられる男根を模した木製陽物、また狩猟具として弓があげられる。このほか槽や椅子の一部なども出土している。

4. 古墳時代以降の遺物

古墳時代初頭の遺物は、石田遺跡の中を流れる2条の自然河川から、大量の土器や木製品が出土している。特に、遺跡の北側を南北に流れる自然河川からは、準構造船の堅板や2mを超す長さの建築部材などが出土している。また、遺跡の中央を東西に流れる自然河川からは、馬鍬や絹糸装飾塗木盾などの特殊な遺物も出土している。

最古の馬鍬 馬鍬（15次試掘調査）は、自然河川北



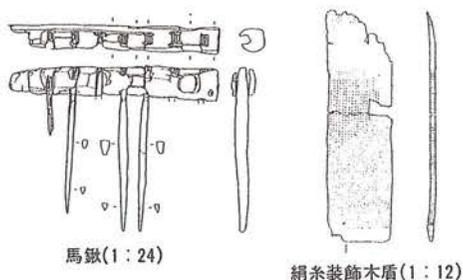
写真5 馬鍬出土状況

肩の上層から出土した。残存する大きさは台木の横幅が0.7mで、歯数の割付から全体のおよそ2/3が残存しているとみられ、復元すると横幅約1mの馬鋏となる。台木には歯の装着穴が8孔と、歯と直交する方向に引棒を差し込む穴が確認できる。歯は上面からのクサビ打ち込みで7本が台木に装着されており、3本は完形で残り4本は基部のみ残存しており、歯数の割付から想定して全体で12本だったことがわかる。歯の長さは0.47~0.53mで断面は二等辺三角形に近く、進行する側が刃状に削られる。材質は台木がヒノキ、歯はアカガシ亜属とみられる。出土した河川跡は下層で弥生後期の遺物をもつが、埋没時期を示す上層土器は古墳時代前半（4世紀末から5世紀初頭）のものである。馬鋏もこの時期に比定できることから、大陸からの牛馬耕導入が従来の説より百年以上も早まり、4世紀末から5世紀初頭にあったことを示しており、日本の農業技術史上重要な発見といえる。

絹糸装飾木盾 馬鋏が出土した河川の下流地点で、絹糸装飾の黒漆塗り木盾が発見された（7次調査）。残存する大きさは縦38cm、横11cm、厚さ9mmのモミ製で、全体の1/6程度が残っている。木地全面に、約3mm間隔で連続した針先ほどの小穴を多数穿って、相似形の凹字形幾何学文様を描き、ここを糸でかがって補強し、さらにその上から黒漆が塗られている。この木盾は、今までに見つかっているものに比べ綴じ糸の間隔が細かく精緻で、文様も繊細な表現をしている。黒漆の顔料も、油煙ないし松煙などからなる精錬されたものを使用していることから、当時の工芸技術を考える上で

大変貴重な資料となるものである。また実体顕微鏡による糸断面観察から、糸が家蚕繊維を撚った絹糸であることが判明した。共伴土器からみて、既出の奈良県南郷大東遺跡（5世紀前半頃）出土品より古く、盾に使用された絹では最古品（4世紀後半）となる。さらに古墳に副葬される「漆塗り革盾」や、盾形埴輪の文様系譜を考えるうえでも貴重な資料である。なお当資料は、美術工芸性の高さからみて戦闘に用された実用品ではなく、有力者が保有した威儀具ないし装飾品とみられる。

以上のほか石田遺跡からは、12世紀後半から14世紀の遺構や遺物も検出されている。主な遺構として、現地割りと一致する方位の掘立柱建物や溝跡、現畦畔・水路直下に埋没する溝跡などがある。その中には大字の境界溝が現在と同一地点で検出されており、現状の方格地割敷設がこの時期までさかのぼることが判明した。



第2図 青銅フィゴ羽口出土状況

5. まとめ

以上のとおり石田遺跡出土品は、縄文時代の土偶、弥生時代後期の木器・青銅器生産遺物、また古墳前期の渡来技術をうかがう物など、実に多様な内容を持っている。特に弥生時代以後の状況は、当地が琵琶湖へ展開する良港を有していたことと関係する。近江は日本海の良港、敦賀・若狭とは山一つ隔てるにすぎず、卓越した航海技術で渡来した人々は内湖からクリークをわたって、湖東平野一端の港にたどり着いたのだらう。持ち込まれた文物は首長の地域支配に供され、高度な技術を駆使し様々な物品が生産されたのであろう。また、環濠や自然河川から見つかる多量の木器群には、弥生時代後期から古墳時代前期ごろの社会相を復元するに足る多くの情報が内包されている。生産や技術的側面に関することをはじめ、今後の整理・研究でさらに多くの新情報が提供できるであらう。

（能登川町教育委員会 植田文雄・西 邦和・杉浦隆支）

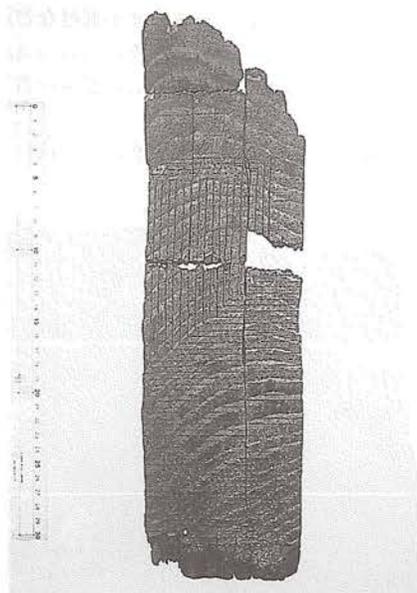


写真6 絹糸装飾木盾